

【問題】

【一】 出典…小町谷朝生『視覚の文化』／オリジナル問題

解答

問1 あ⇨分岐 い⇨証例 う⇨雌雄 え⇨囁 お⇨様相

問2 ハ 問3 イ 問4 ハ 問5 不可避

問6 普遍的な視覚的理解性がある〔13字・4～5行目〕 問7 二

問8 脳の姿勢とは、我々が対象を見てそこからどういう意味を読み取るかを決定する脳の機能のことであり、それは各人が帰属する地域や時代のあり方と関わるため、対象の意味をどう読み取るかという視文化性の、地域や時代における相違をも生み出すものである。〔118字・解答例〕

解説

問1 あまり馴染みのない語もあるが、前後から十分類推できるはず。語は文脈の中で意味をなすものなのだから、漢字の問題といえども、前後の文脈を考慮すること。

問2 「ただリアルという言葉だけを通して考えてしまう」という考え方は、「その点（⇨「彼らと我々とはリアルさが違っている」）「7行目」という点）を無視して」（7行目）なされる考え方である。例えば、ある国で描かれたものがあるとする。それは日本人である我々の目には装飾のために描かれたものに見えるが、それが描かれた国の人々にとっては、ある宗教的な意味をもっている場合があったとする。こういう場合、そこに描かれたものがもつ「リアルさ」には大きなあたりがあるということになる。ところ

が、我々はその点をあまり自覚していない。「リアル（現実感）」というものは、時や場所によって異なることがあるということも自覚していないのである。ことに「絵」や「図柄」は、多くの場合、見ると何の形であるかぐらいのことはわかる（＝「普遍的な視覚的了解性がある」〔4～5行目〕）ために、誰もが見ても同じものをそこに読みとるものだと思いますがちなのである。

イは「考え方」「リアルという言葉のもつ一致点だけで割りきってしまう」がまずい。□は「捉え方」がまずい。「捉え方」ではなく、「リアルさ」そのものが違うのである。ニは「普遍的な視覚的了解性」がまずい。絵や図柄には「もともと普遍的な視覚的了解性がある」〔4～5行目〕のだから、「普遍的な視覚的了解性があると考えてしまう」のは当然のはず。問題は、絵や図柄に「普遍的な視覚的了解性」があるために、我々が「リアルさ」も普遍的なものだと思ってしまうことにあるのだ。ホは「読み取り方」以前の「リアルさ」について記されていないので問題外。

問3

あるものをどう見るか（＝どういう意味のものとして読むか）には社会的な規制力が働いているのであり、自分の自由意志で見ているのではない。つまり、「見ること」は「社会的行為、とくに文化に関わりをもつ社会的行為」〔17～18行目〕である。どう見るかには文化のありかたによる「型」があるのであり、「見方とは見型」〔14行目〕なのである。

□のように「見るという行為は規制力としての見方がある」という記述はないし、その見方が「あつてこそ」という因果関係もない。ハは「見ること自体を……規制している」がまずい。ニは「自由意志を規制する……社会的な力」がまずい。「自由意志を規制する」のではなく、「見方」を規制するのだ。ホは「個人の見方は……限られてくる」は本文の記述とまったくずれている。

問4

傍線部の直前には、「ごちゃごちゃした色彩のなかにある物体の形」〔34行目〕の例が示されているが、ここを読む限りにおいては、ホの「取り除いたうえで」という解釈は出てこない。そもそも、「まず、ごちゃごちゃした色彩を取り除いて、見たいものだけのすつきりとした形にしておいて、そのうえでその見たいものを見よう」などということが実際にできるはずもない。ここは、「知覚しているごちゃごちゃした色彩は意識において無視し、自分にとって必要なものだけを見てとる」ことを言っているのだ。

傍線部でいう「様々な雑音」とは比喩であつて、「雑音」としての音だけをいうのではないから、イはまずい。その意味では、「色彩」だけに限定している□もまずい。また、傍線部には、□のような「その社会での認められた表現として理解することができる」という意味は含まれていない。その点でニも同様に不適。ホは前述の通り「取り除く」が不適。「取り除く」のではなく無視する

のである。

問5 それぞれの時代や地域には独特の「視文化性」がある。ある形をどういう意味のものとして見るかという、その社会固有の制約である。考古学や美術史で取りあげられる作品はそのことを具体的に表している。だが、やがて作家の個性がそうした見方の社会性・集団性に反逆するようになると、「社会と個性の間の摩擦」が必然的に、起こるべくして起こることになる。空欄の後で、「それ（＝社会と個性の間の摩擦）」を「どうにも埋められない断裂である」（53～54行目）と説明していることもヒント。

問6 傍線部は「造形言語といわれる形や色彩」（57行目）についての記述である。それは「コードそのものの性格が弱い」ために、「かなり理解できる」（58行目）と思われている、これは、第一段落で記述されていることの言い換えであり、「絵のような形式を通じての表現」（4行目）が「だれでも見ただけで多少の見当はつく」（5行目）と思われることに他ならない。とするならば、傍線部に該当するのは第一段落の「普遍的な視覚的了解性」（4～5行目）が、字数の面からも妥当である。早大は学部を問わず文章の「構造」を根拠に解答を求めさせる設問も多いので、その最終確認の意もこめてこの設問を用意した。

問7 我々が対象を「見る」ということは、単にそのものが眼に映じているということではなく、そこに「何を見ているか」（62行目）ということである。そして、「何を見るか」には地域・時代による違いがあつて、それが「視文化性」なのである。この「視文化性」は、「見方とは見型だったということになる」（14行目）と記述された「見型」のことである。もちろんこの「見型」は「日常生活全体」に及んでいる。

これは、イのような「同一性」ではない。すべてが同じ意味のものとしてとらえられるわけではないからだ。また、もし「同一性」を入れるならば、「しかし、それ（＝見方の同一性）によって個々の視文化が豊かな変化をもつて成立してきた」（64～65行目）に続かなくなる。また、「集団」がここで問題となる必然性はないため、口の「集団性」もまずい。ハの「文化性」では全く意味が通らない。ホの「客観性」も「視文化性」とは関係がない。

問8 「脳の姿勢」に関しては、42～45行目の「自分たちの理解できるものだけが……はつきり分けて受け取られるのである」という

記述が参考になるだろうし、さらには、61～63行目の「現実が眼にどう映っているかの違いではなく、そこから何をjているかの違いである。つまり、脳がどんな濾過器をもっているかということによる違いである」がより明瞭に「脳の姿勢」を示している。これらの記述を参考にすれば、「脳の姿勢」とは「ある対象を目にしたときに、何を受け入れ、何を捨てるかという、濾過器としての脳の機能」であることがわかる。あるものだけを受け入れる（＝意味として読みとる）から脳の「姿勢」といえるのだ。

次に述べなくてはならないのは、「脳の姿勢」と設問条件である「視文化性」との連関である。それは20行目冒頭の記述が参考になる。そう、「視文化性」は「脳の姿勢によって左右される」（20行目）のである。具体的にいうと、「脳の姿勢」が「地域時代」のありかたと結びついているために、「視文化（性）」もまた「地域、時代によって異なる」（20行目）るものになる、ということだ。解答の要素として、①「脳の姿勢」が視覚とどう結びついているか（それが「脳の姿勢」の説明となる）、②「視文化」とはどのようなものか、③「脳の姿勢」と「視文化」とはどのような関係を有しているのか、の三点が必要である。

なお、「脳の姿勢」を「社会的規制力となる」という方向で説明しようとする、と、「視文化性」との連関を記述できなくなる。視覚作用の点に限定して説明すべきである。また、「濾過器」は比喩表現なので解答にはそのまま使わず、説明を加えるか一般的に理解可能な言語に置き換えるべきである。もちろん、字数が多いので無理に一文で記述する必要はなく、二～三文で記述しても構わない。

このような記述問題は、先ず説明すべき要素をきちんと析出することが肝要であり、その前提はもちろん、正確な本文読解である。字数の多さに恐れることなく、本文と真摯な姿勢で対峙すれば、自ずと解答作成の方向は見えてくるはずである。

【配点の目安】 50点 問1 各3点×5＝15点 問2 4点 問3 4点 問4 5点 問5 4点 問6 4点 問7 4点 問8 10点

問8

〈ア脳の姿勢とは、我々が対象を見てそこからどういう意味を読み取るかを決定する脳の機能のことであり、イそれは各人が帰属する地域や時代のあり方と関わるため、ウ対象の意味をどう読み取るかという視文化性の、エ地域や時代における相違をも生み出すものである。〉…10点

※ア4点、イ・ウ・エ各2点

現代語訳

秋の末のころ、(八の宮は、いつも) 四季ごとに(習わしとして) お催しになる御念仏(のお勤め)を(なさるのに)、この(宇治)川のほとりは、網代(に寄せる)波(の音)も、このころではいっそう耳やかましく落ち着かないから、というので、例の阿闍梨の住む山寺のお堂に(籠るために)お移りになって、七日のあいだ勤行をなさる。姫君たち(お二人)は、たいそう心細く所在なさもつって、物思いに沈んで(日々を過ごして)いらっしやった(、ちょうどその)ころ、薫の中将さまは、「長いこと(八の宮さまのもとに)参上しないことだ」とお思い出し申し上げなされたのにまかせて、有明の月が、まだ夜更けに(やっ)と差し昇るころに(都のお屋敷を)出発して、ごくこっそりと、お供に(連れる)人数も少なくして、目立たない身なりでおいでになった。(八の宮のお住まいは、宇治)川のこちらがわなので、船など(に乗る)煩わしさもなく、(お出掛けは)御馬で(のこと)であった。(山道に)だんだん入ってゆくにつれて、一面に霧がたちこめて、道も見えないほどの茂っている木々の中をお分け入りになると、ひどく荒々しい風の吹き競う(勢いのため)に、ぼろぼろと盛んにこぼれる木の葉の露が(お体に)散りかかるのも、たいそう冷たくて、自ら求めて出かけたことではあるが、ずいぶん濡れておしまいになった。このような(お忍びの)お出掛けなども、ほとんどし慣れていらっしやらない(薫の中将の)気持ちには、心細くもまた興味深いことにも感じないではいらっしやれなかった。(そこで一首)

山おろしに……山から吹きおろす強い風に堪えきれずに散り落ちる木の葉の露よりも、(さらに)むやみにもろくもこぼれる私の涙であることよ

(中将さまは)山里に住む者が目を覚ま(して騒ぐ)のも煩わしいと(思っ)て、隨身の(先払いの)声もおさせにならない。柴を編んだ(粗末な庶民の家の)垣根(のあいだの道)を分け入りながら、どこともはつきりしない(ささやかな)水の流れ流れを踏みながら歩む馬の足音も、やはり立てないようと、気をお配りになったのだが、(薫君のお体から自然に発せられる)隠しようもない御香りだけは、風に運ばれて、どなたの香りだろうかと目を覚ます家々もあったことだ。

解答

問1 A 川の水音が高くなって念仏に集中できないから。〔22字・解答例〕

H 〓 付近の庶民が薫の来訪に気付いて騒ぐと煩わしいから。(25字・解答例)

問2 B 〓 中将の君 I 〓 中将の君

問3 C 〓 目立たない姿でおいでになった(14字・解答例)

E 〓 自ら求めて出かけたのではあるが(15字・解答例)

F 〓 ほとんど慣れていらっしやらない(15字・解答例)

問4

品詞名	名詞	助詞	助動詞	助動詞
設問語句	御馬	にて	なり	けり

問5 3

問6 (陰曆) 九(月)下(旬) 「長」月…別解例

解説

問1 A 理由説明は、《已然形+「ば」》の形で表されているとは限らない。《順接確定条件》を示すことができるのは《連体形+「を」に》の形もあるし、また「〜とて」という引用句が続く行為のものになる心情や思惟を示す場合は、それが実質的に根拠となることも多い。ここでは、1〜2行目に「この河面は、網代の波も、このころはいとど耳かしがましく静かならぬを、とて」とあるのが、まさにこのパターンに相当する。したがってこれを「〜から」という文末も含めて二十五字以内にまとめてやればよいわけだ。ただし、単に「うるさいから」などとしては、傍線部を含む節が「寺の堂に」という修飾語を伴うことに對する配慮が不足していることになる。問題文に先立つ説明文にも「八宮は…：仏事に専念」という表現があることに注意し、かつ問題文冒頭で「四季にあててし給ふ御念仏を」とあることに鑑みれば、「うるさい」のは「念仏の邪魔」だということになり、これが寺に籠もるこ

との直接の原因となっていることになる。したがって答案の中心すなわち後半には「念仏」あるいは「勤行」などの表現を盛り込む必要がある。そのうえで、残りの字数を使って問題文に示された「うるささ」を具体化しておけば万全である。

H 前問と同様に、まずは傍線部以前の「山がつのおどろくもうるさしとて」に注目する。逐語訳すれば「山住まいの庶民が目覚めますのも煩わしいと思って」程度となろう。しかしこれもまた前問と同様に、眠っていた他人が目覚ましたからといって、それだけでは薫にとつて別に厄介なことではないはずだということに注意。つまりここでも因果関係の上で厳密に言えば途中が省略されているわけで、その説明を要求している問題なのである。そこで付近の庶民と薫の立場とをつなぐ事項を考えると、そもそもこの場面での薫は4行目傍線部Cに見られるとおり「やつれて」すなわち服装も目立たなくしておおびでここまで来ている。「せつかく眠っている人々を起こすのは気の毒だ」という心情もなくはないだろうが、実際に示された語が「うるさし」と薫の側の迷惑な気持ちを示しているのだから、「目立ちたくない」あるいは「騒がれたくない」という心情を中心に据えなければならぬことになる。

問2

B 傍線部には謙讓語と尊敬語が両方とも含まれて《二方面敬語》となっているので、敬語を頼りに主語を特定しようとしてもうまくいかないはずだ。このようなときは、いったん敬意を度外視して、具体的な行動で考えるとわかりやすい。すぐ前(3行目)に「中将の君」が格助詞を伴わない体言として示されているので、これは後続の用言に対して主語に立つことができる。これをそのまま傍線部Bの主語として「中将の君は、『長いこと(行って)いないな』と思い出して」と解釈してもこの問題ではそれでよかつたわけだが、念のために次の点に注意されたい。すなわち、「中将の君」がすぐ後にある「久しくまゐらぬかな」の主語となっている可能性もあるし、また傍線部Bの客語(＝直接目的語)としても解釈できるのだ。だとすると、「中将の君は長いこと(来て)いないな』と思い出して」あるいは「中将の君のことを『長いこと(来て)いないな』と思い出して」となって、2行目にある「姫君たちは」を主語とすることもできそうなのである。

ここで解釈の決め手になるのは、実は傍線部直後の「ままに」という表現である。これは「くまかせて」「くした勢いで」といった意を示す表現なので、その後に続く表現と主語が一致することになる。したがって、「馬に乗って出かける人物」すなわち「中将の君」を主語とするのが妥当だと考えるべきなのだ。

I 「用意す」は、現代語だとおっぱら何かを待ち受けるようなときに用いられるが、本来は文字どおり「意を用いる」すなわ

ち「気を付ける」「注意する」というのが原義である。とするとここでは直前の「ふみしだく駒の足音も、なほ忍びて」と考えた人物が主語であり、右の設問でも見たとおり、馬上の人物で敬意の対象となる「中将の君」を採るしかない。

問3

C 動詞「やつる」は「身なり・見た目が目立たなくなる」意を示す自動詞だが、ここでは自然にそうなってしまう必然性が示されていないので、文脈上「やつす」すなわち他動詞の意味で解釈してかまわない。いずれにせよ、現代語の「病氣や疲れて外見が衰えた様子になる」といった意味に取られないように訳出することに注意する。あとは、尊敬語「おはす」をきちんと尊敬表現で訳出すること。「おはす」には「あり・をり」「行く・来」といった二系統の常態語が対応するが、現代語でもこの二系統の動詞は尊敬語では同一語で表現できるので、一般にはどちらも「いらつしゃる」「おいでになる」などとすればよい。さらに、助動詞「けり」は物語の地の文にあるので、《過去》で訳すのも忘れないことだ。

E これは慣用句である。「人やり」は「他人によって強制されること」の意の連語だが、通常は否定的文脈で用いられる。「人やりならず」がその最も直接的な表現で、「他人によって強制されたことではなく」すなわち「自分の意志でおこなって」「自分から進んでおこなったこととはいえ」の意味で使われる。慣用句は品詞分解しても正解は得られない。これからの時間でも、せめて見たものはすべて憶えてゆこう。

F 「をさをさ」が《打消》と呼応する《陳述の副詞》であることがわかっているかを見る設問。これは「ほとんどない」という部分否定を示す表現で、「さらに・つゆ」《打消》（＝まったく・けっして・すこしもない）の全否定強調よりは弱いが、「いと」《打消》（＝あまり・それほどくない）の部分否定よりはかなり強い。加えて、動詞「ならふ」が「慣れている」の意味であることも答案に表現すること、さらに、尊敬語「おくになる」の訳し方が明確に表現されていることも、採点のポイントとなる。

問4

ポイントは、「にて」を分割しないことと、「なり」の識別との二点である。まず「にて」は、「に＋て」としやすが、仮にそうだとしても、ここでは直前に体言があることから「に」が《格助詞》であることは動かず、「て」つまり《接続助詞》（＝連用形接続）は続きようがない。したがって「にて」を一語の《格助詞》（現代語の「で」に相当）と見ることになる。さらに「なり」だが、これを《動詞》「成る」ととってしまうと「くと」といった補語が補充できるはずだが、そのような要素が文脈的に見あたらない。「馬に成る」ではおかしいし、そもそも「馬にて」といってしまうと「成る」ことはできない。「鳴る」「生る」などと

しても意味が通じないのは同じだし、「慣る」では下二段活用だから《過去》の助動詞「けり」に接続する連用形は「なれ」となっているはずだ。したがってこれは動詞ではない。助動詞の「なり」には《終止形（ラ変型連体形）接続》の《推定・伝聞》があるが、接続が違う。残りは《断定》の「なり」である。これを「連体形接続」と覚え込んでしまっていると厄介だが、実は《断定》の「なり」は本来《体言（準体言）接続》である。「連体形」は《準体言》の代表に過ぎない。ここでは「御馬にて」全体が「御馬で（のこと）」との意味で《準体言》となっているのだ。

問5 和歌の一部だから音節数が決まり、空欄部には三音節（母音三個分）の語が入る。ところが選択肢は、1「すくせ」、2「いのち」、

3「なみだ」、4「しづく」、5「たもと」と全て三音節の語で、これでは絞れない。やはり意味で考える他はない。ここで、和歌の中の語を吟味していくと、格助詞「より」によって空欄部と比較・対比されるのが「露」であることがわかる。「露」は「はかないもの」のたとえとして「命」にも関係の深い語だが、そのままに水滴であることから「涙」「雫」との関連も捨てられない。

このようなときに重要なのが、「物語・日記文中の和歌は、その成立の事情を『詞書き』として前に持っているはずだ」という常識である。実際にこの文章でも、歌の直前に詠み手である薫の心情が「心細くをかしくおぼされけり」と説明されている。このような心情に鑑みて、「涙」がもっとも相応しいということになる。なお、「袂」は「袖」に近く、「袂（＝袖）を濡らす」などの表現で「涙」を暗示することが多いが、空欄部の前の修飾語が「もろき」となっているので、ここでは採れない。

問6 まず、文章冒頭に「秋の末つ方」とある。陰暦においては、年頭の正月から三ヶ月ごとを四季と見るので、「秋の終わり」は「九月」ということになる。「長月」もいちは許容解としたが、これはそもそも「陰暦」の表現なので、「陰暦長月」では「陰暦陰暦九月」ということになってくどい。「九月」で十分だろう。さらに、3～4行目の「有り明けの月」から「下旬」であることがわかる。陰暦では日付と月齢が連動するので、対応関係を整理しておくこと。「有明」の対義語の「上旬の月」は「夕月夜^{ゆふづくよ}」である。

【配点の目安】 50点 問1 各6点×2＝12点 問2 各4点×2＝8点 問3 各6点×3＝18点 問4 4点 問5 4点 問6

4点（完答）

問1

A 〈ア川の水音が高くなってイ念仏に集中できないから〉…6点

※ア・イ各3点

B 〈ア付近の庶民が薫の来訪に気付いてイ騒ぐと煩わしいから〉…6点

※ア・イ各3点

問3

C 〈ア目立たない姿でイおいでになった〉…6点

※ア・イ各3点

E 〈ア自ら求めてイ出かけたのではあるが〉…6点

※ア・イ各3点

F 〈アほとんどイ慣れていらっしやらない〉…6点

※ア・イ各3点

*アは、「ほとんどくらない」の部分否定を訳出できて可

【問題】

【一】 出典…中村良夫『風景学入門』／オリジナル問題

解答

問1 □ 問2 I □ II □ III ホ IV □

問3 環境調和願望〔42行目〕 問4 ハ

問5 生命の不安についていた〔41～42行目〕 問6 二

問7 1 〓惑星 2 〓曖昧 3 〓飢餓

解説

本文は、環境問題というと公害問題をのみ中心に論議され、景観問題が置き去りにされていることに対して、美しい国土の景観が容赦なく悪化していることを指摘、明日の生活環境を考えるために、風景への愛着を培うために書かれたものである。中国の古代から根強く人々に信じられてきた五行の説と、調和願望の考えをもとに、古代の景観問題を考察することを通して、人々にとって、風景はどのように考えられていたか、それを現代の問題の中にすえた時、風景をどのように考え直すことができるかという観点から、景観問題を論じている。

まず、五行の説とは何かを明確につかむことが大切だ。「五行とは、要するに、環境構成材料の相貌的知覚が生み出した相克と相生の切実な神話である」(55行目)という説明に、それは尽きる。我々が、世界を見渡した時、それも自然科学の成果による目ではなく、世界を構成しているものを生活人の目で眺めた時、古代中国人の五行とさして変わらぬ、木・火・土・金・水という五つの要素を抽出するのではないか。これが「環境構成材料の相貌的知覚が生み出した」ものの意味である。

一方、古代人にとって、「空間恐怖」というものがある。生命の不安に根ざした、大地に対する恐怖である。人間は自然条件の許す限りでしか生存は保証されない。五行は、しかし、ダイナミックなもので、相生と相克があつて、その調和が切実に望まれる。風水思想がそこに芽生える。五行の力関係を利用して生命の実存的不安を解消し、平穩な人間環境を創ること——そこに呪術的造園術が生まれてくる。自分の周囲の景観を調和のとれたものにするという風景術が考えられてくるわけである。したがつてそれは、立木があり、緑が多ければよいというものではない。立木は立木の姿が備わっていなければならない。

以上のように本文の骨格を理解した上で、個々の設問を考えていこう。

問1 問題文は、まず「五行」についての説明があり、続いて「五行」の「相生」と「相克」について展開し、そのような考え方の根底へ目を向けて、風景術が生まれる契機へと筆を進め、全体を要約するという展開の仕方である。このように考えた上で、挿入文の内容を考えると、「五行」についての説明部分に属することが推定される。したがつて、イカ口が適当ということになる。あとは「大地」という言葉に注目すればよい。

問2 Iについて、全体的な理解を前提に、「五行というのは、……ではなく、……なのだ」という文脈をおさえる。つまりIは「実存する『大地の原像』」に対するものである。「実存する『大地の原像』」とは、「生き生きとした豊かな環境の形相」(15行目)の集約的な表現である。それは、科学者の目で捉えたものではなく、「われわれが常日ごろ抱いている自然に対するイメージ」(16～17行目)である。つまり、「物質に関する科学的理解ではなくて、生活人の五感による認識」(9行目)によって生じた捉え方である。ここまで整理できれば、解答できよう。

IIは、前の段落との関係を考えることによつて、正解を導ける。前の段落は「五行のバランスが崩れかけたときには人為によつてそれを回復しうる」といつている。それに対して「ゆらめく焰……調和を図ることができる」は、その具体例である。

IIIも、IIと同様に接続語を入れる問題。前の段落で、「それはつづくであろう」といったことを受けて展開されている。「いつもあるはずはない」と前の段落の意見に対して譲歩し、「しかし」で、前の段落の「つづくであろう」の箇所を強調している文脈である。譲歩のニュアンスを表すのは「もちろん」の意のホ「もとより」。

IVは、空欄直後に「この力が信じられなければ」とある。つまり、「力」であり、それは「信じ」るものである。また、この段

落が「五行」の説明であり、さらにそれは五行のバランスを保とうとする人間の営みとしての造園であることを考えてみれば、
「Ⅱ、ゆらめく焰」で始まる32行目からの段落を受けての表現であることがつかめよう。

問3 空欄部分を含む文が、例えば単なる緑に対する欲求ではなく、「水や緑や土や石の調和のとれた風景」(52行目)に対する欲求について述べていることに注意。次の段落で「現代人の希求する環境構成材料の調和感覚」(56行目)と言われており、さらに、その次の段落でそれは「五行的調和願望」(60行目)と言い換えられている。あとは字数制限に注意して、同義の語句を探す。

問4 「風景の集約的な表現」と同じ意味内容の語句を文中に探してみる。「生き生きとした豊かな環境の形相」(15行目)「われわれが常日ごろ抱いている自然に対するイメージの内容と本質的には変わらないもの」(16～17行目)が、それにあたる。前の段落で、「ふうの生活人は、……きわめて自然だからである」(11～13行目)と述べている点がヒントになる。

問5 「のんきな性質のものではなかった」ということは、逆に言えば「切実な」ものであったということである。「人間居住地に風景の彫琢をほどこさずにはおられぬ切実な」(46～47行目)ものはどこからきたか。筆者は、人間が大地に対して「自然条件の許す限りでしか人間の生存が保証されない」(43～44行目)ということ、「生命の実存的不安を解消する手だて」(45行目)としてであると説いている。

問6 イは12～13行目の「木・火・水・金・土という五要素は……きわめて自然だからである」、ロは20～22行目の「古来、五行のあいだには……ダイナミックな構造をいうものである」、ハは53～54行目の「五行的……息づいているからであろう」、ホは「しかし、生存可能条件……はじめて有効に働く」(44～46行目)という表現から妥当だとわかる。問題は二の表現である。最終段落の「こうした知覚はよほど普遍的な性質をもっている」(62行目)という記述は、「材料の相貌に基づく物質操作の神話」(61～62行目)と「環境構成材料の相貌的知覚が生み出した相克と相生の切実な神話」(55行目)との二つについて述べたものであって、「五行」の考えが「唯一無比のすぐれた世界認識」であることを言おうとしたものではない。

3点×3＝9点

【配点の目安】

5点 問1 5点 問2 各4点×4＝16点 問3 5点 問4 5点 問5 5点（完答） 問6 5点 問7 各

ポイント

贈答歌を中心とした文章からの出題。入試では和歌を含む文章が出題されることは珍しくない。掛詞、縁語といった修辭技巧や区切れ等には特に注意を払おう。ただし読解や解釈といっても、和歌だけを独立したものとして現代語訳を試みる…という方法は避けること。地の文に書かれていることをヒントにしつつ、和歌が詠まれた状況や詠み手の心情を読み取ろう。今回のように歌のやりとりによって本文が進む場合は、前後の歌とのつながりにも着目すること。

現代語訳

その夜の月があまりに明るく澄んで（いたので）、女のほうでも宮のほうでも、（一夜を）物思いに耽りながら（月を）ながめ明かして、あくる朝、（宮は）いつものようにお便りを送ろうとなさって、「童は来ているか」と（側近に）お尋ねあそばす（ちょうど）そのころ、女のほうも霜がたいそう白いのはとせずにはいられなかったのか、

手枕の…：私の手枕の袖にも、（夜通し宮さまが恋しくて）起きていたので（涙が）霜になって置いておりましたことです。今朝ふと見ますと、真っ白になって

と（手紙で）歌をさし上げた。（それを受け取った宮は、）くやくも先を越されたなとお思いになって、

つま恋ふと…：妻と思うあなたが恋しくて、起き明かした（私の）涙の霜だから（真っ白なのですよ）

と（ひとりごとを）おっしゃったところ、やっと童が参上したので、（宮は）御機嫌ななめで（側近を通じて童に遅参の理由を）詰問させたので、（側近は）「おまえが」早く参上しないので、ひどく責めておいでのようだよ」と（言つ）て、（童に宮のお便りを）渡したので（童は女の家）に持って行って、「まだこちらさまからお歌をお差しあげにならないかつた前に（宮さまから私に）お召しがありましたのに、今まで参上しなかつた（私を）お叱りになります」と（言つ）て、お便りを取り出した。（宮のお便りは）「昨夜の月はすばらしかったね」と（始まつ）て、

寝ぬる夜の…：（あなたが）寝てしまつ（て見なかつ）た（であろう）先夜の月を、（ひよつとして）御覧になったかと、今朝こ

そ（涙の）霜が置くほどに起き明かして待っていました、あなたをはじめ誰ひとり手紙をくれる人としていません

(とある。)なるほど(童の言うとおり) あちら(の宮)さまのほうから先にお歌をくださったのであるようだと思いつけても、(女は)うれしい。(そのお返事にわざと)

まどろまで……(私は)一睡もせず先夜は一晚中ながめていた月(なのですが、その月)を(宮さまは)起き(てから御覧になつたのに(ずっと)夜を明かして見たような顔をしておいでですね(いったい本当なのでしょうか)

と(手紙で)申し上げて、この(使いの)童が「(私を)ひどくお責めになりました」と言うのが(それも自分への愛情の証かと女は)明るい気分になって、(紙の)端に、

「霜の上に……霜の上に朝日がさしているようです。今はもう、(霜もとけるように御勘気の)とけてしまっている様子を(童に)見せてやってくださいませ

(この子の様子からすると)ひどくしおれているようでございますわ」と書いた。(折り返し)宮からは、「今朝(あなたが)得意そうでしたのも、ひどく憎らしい。(いっそ、私の手紙を届けるのが遅れた)この童を殺してやりたいとまで(思ってしまうよ。)

朝日影……朝の日光がさして消えるはずの霜だけれど、なかなか消えそうにない空模様(のように、私の機嫌はなおらないので)ですよ」

と(お便りが)あったので、(そのお返事に女からは)「お殺しあそばすおつもりのように聞こえますが」として、

君は来ず……宮さまはおいでにならず、時たま文使いにやってくる童のことを、生かしておいて(お手紙を持って)行けとも、もうおっしゃらないおつもりですか

と(手紙で)申し上げると、(それを読んだ)宮は声を立ててお笑いあそばして、「ことわりや……(あなたのお言葉は)もつともだ。もう殺しますまい、この童はね。隠し妻のあなたのおっしゃることに従いまして

(と)ところで)手枕の袖のことはお忘れになってしまったらしいですね」と(宮からの次の手紙に)書いてあるので、(女が、)

人知れず……(宮さまとの恋を)誰にも知られないようにいつも心にかけて(そのつらさに)耐えておりますのに、あの手枕の袖を私が忘れたとお思いになるのですか

と(手紙で)申し上げますと、(宮からのお返事の手紙には、)

もの言はで……(私が)何も言わずにだまっただまみにしていたとしたら、(あなたはおっしゃるように心に)かけてでさえ手枕の

袖のことなどけっして思い出しはしなかつたでしょうよ（私のほうこそ恋の思いは忘れるわけがないよ）
（と書いてあった）

こうして（熱心な恋文のやりとりが続いたのに、その後宮からは）二、三日、なんのお便りもくださらない。（女の立場からすれば）期待できそうに（宮が）仰せあそばしたお言葉も、いったいどうなってしまったのかと思いつづけると、（女は）眠ることもできない目を覚まして横になっていると、夜もしだいに更けたようだなと思われるころ、家の門をたたく音がする。あら心当たりもない（のに誰かしら）と思っただけれど、（取り次ぎに）たずねさせると、宮からのお便りであった。思いがけぬ時刻なので、「（私の宮への）想いが通じたのか」としみじみうれしく思つて、（すぐに脇門からお便りを取り入れさせて）妻戸を開けて（月明かりに）読んでみると、見るや君……あなたは御覧になつていますか。夜が更けて山の稜線にかかつて曇りもなく澄んでいる秋の夜の月を

（と書いてある。女は）思わず（月を）ながめずにいられなくて、いつもよりも（お歌が）しみじみと感じられる。（とはいえ、表）門も開けていないので、お使いが待ち遠しがつていられるかもしれないと思つて、（急いで）御返歌（を差しあげる。）

ふけぬらむ……夜が更けたらうと思つたものの（宮さまが恋しくて）眠れずにおりますけれど、（月を見たりするとまた今よりも）と胸がいつぱいになって）かえつて（物思いが募るばかり）ですから、月だけは見ないことにしております

と（詠んで）あるのを（読んで）、（宮は）意表をつかれた気持ちがして、「やはり（あの人は）つまらぬ女ではないなあ。なんとかして身近に置いて、こういう気慰めの和歌でも詠ませて聞きたいものだ」と決心なされた。

解答

問 1 A 〓 (ウ) B 〓 (エ) C 〓 (キ) D 〓 (ク) E 〓 (カ)

問 2 ① 〓 (イ) ② 〓 (エ) 問 3 (オ) 問 4 1 〓 (ア) 2 〓 (ウ)

問 5 (ウ) 問 6 (ウ)

問1 空欄Aについては、空欄の直前が未然形であるので未然形接続の助動詞……と考えてもこの選択肢の中には沢山ありすぎて、あまり有効な決め手とはならない。それよりは、「おどろかす」が「気づかせる・はっとさせる」という意味の心情を表す他動詞である（これが自動詞でないのは、自分自身の動作を他者の動作に見立てる技巧上の理由から）こと、ここでの主体が「女」であること、対象が「霜のいと白き」である（＝人物ではない）ことから、「はっと気づかされた」程度の意味の《受身》に取るのが適当であろう。なお、空欄には「れ」が入る。

空欄Bの直前の「さいなむ」（四段動詞）は、終止形あるいは連体形と考えられるが、選択肢の中に連体形に接続するものがないので、ここは終止形。終止形接続のものは(エ)と(オ)であるが、空欄の前に「御気色あしうて」とあるので、ここは《推定（視覚推量）》の(エ)をとる。なお、「らし」が散文に用いられるのはほぼ上代（奈良時代以前）のことで、中古（平安時代）以降は「らし」は敬語として残るばかりである。また、ここで「めり」すなわち実際に目にした物事から何かを推定する助動詞が用いられることから、空欄を含む発言は「童」のものでなく宮からの手紙を童に取り次ぐ人物のものであることもわかる。「さいなむ」には敬語がないが、これは常に上位者から下位者への行為であるので、「つかはす」同様に敬語なしでも敬意を含む表現である。

空欄Cの上に「今は」とあるのに着目。「今は……《打消》で、「もう……ではない」と慣用的に使われる語である。選択肢の中で《打消》の意味を持つものは(カ)と(キ)であるが、これは宮の「童殺してばや」という願望を受けての返歌なので、《意志》を反映している(キ)をとりたい。あるいは、その後の宮の和歌の中で「ことわりや今は殺さじこの童……」とあるところから考えてもいいだろう。

空欄Dは単に「ましかば……まし」の呼応関係（《反実仮想》）に気が付けばよい。

空欄Eは「寝も寝られず」という連語で、「眠ることもできない。眠ろうとしても眠れない。」という意味である。この他「寝」を使った連語としては、「寝の寝らえぬに（＝眠れないでいるのに）」「寝も寝ず（＝寝もしない）」「寝を寝（＝寝る）」などがある。

問2

①は直前に「女も……てや」とあり、「手枕の……」の和歌があるので、この和歌は女のものだとわかる。その中の動詞であるので、素直に(イ)を選びたい。

②は1行前に「今ぞ人参りたれば、……」とあるので、ここで「参る」「参らず」といわれているのは「人」であるところからつかめよう。

だからといって(ウ)を選べないのが、この問題の意地悪なところだ。2行目に「童参りたりや」とあるように、ここでの「人」「童」なのである。だとすれば、ここで選ぶべきは(エ)である。このような設問の場合には、より具体的なものがより適切なものになると心得てもらいたい。

問3 和歌の前に「よべの月は……」とあり、空欄Xの和歌に対する返歌も「まどろまでひと夜ながめし月見ると……」という内容であるので、空欄Xの和歌が月について触れているものでなければならぬことはすぐにわかる。これだけで(ア)・(エ)・(オ)に絞れる。あとは、和歌の直後に「げに、かれよりまづのたまひけるなめり(＝本当に、宮のほうから先にお歌をくださったらしい)」という表現があることに鑑みて、「今朝はしもおきゐて待てど問ふ人もなし(＝今朝こそ起き明かして待っていました、あなたをはじめ誰ひとり御文をくれる人としていません。)」という表現を持つ(オ)を選べばいい。またこれなら、「まどろまで……」という表現にも対応している。「しも」は助詞に「霜」の意を掛け、「起き」に掛けられた「置き」と縁語になる。ちなみに(エ)だと今朝宮が女のもとへ行ったことになって、地の文の内容に反する。

問4 1について。選択肢からここで問題にすべき解釈のポイントは、以下の二点とわかる。

① 「したり顔」だったのは誰か

② 「童殺してばや」の解釈

①の候補は「童」「あなた(＝女)」「私(＝宮)」の三人であるが、「童」は「いみじうさいなみつる」と思っていたほどだから、「したり顔」であるはずがない。宮にしても「御気色あしう」といった有り様なので、「したり顔」とは程遠い。したがって、この「したり顔」は女のことと判断できる。ここから(ア)と(イ)に絞れる。あとは②の解釈だが、「ばや」は未然形(ここでは《確述》の助動詞「つ」の未然形)接続で発言者自身の強い願望や意志を表す。(イ)の「もし……たら」という仮定の表現に由来すると考えられるが、大学入試レベルでは基本的に《願望の終助詞》であることが解るかどうかを見ようとすると考えてよい。したがって、(ア)が正解。

2について。これも1同様、選択肢から問題にすべきポイントがいくつか見えてこよう。

① 誰の「心」であるのか

② どこに「行っ」たのか

(エ)と(オ)は、この二点が押さえられていないのでカットできる。(ア)と(ウ)からは「私の心が宮のもとへ行った」のか、「宮の心が他(の女のもと)へ行った」のかを考えればいとわかるが、直後の宮の女を想う和歌をみればあきらかにこれは前者の意味である。とつかめよう。したがって(イ)もカット。残った(ア)と(ウ)の見きわめについては、(ア)が「おぼゆ」の辞書義からはずれていることから、簡単に(ウ)が選べよう。

なおこのような問題の場合、「あはれ」の意味にこだわるのは得策ではない。この言葉は心をうたれる(感動している)状態であることを示しているにすぎず、どう「あはれ」なのかは文脈から推測するしかないからだ。

問5 「おしたがふ」を漢字で書くと「推し違ふ」で、傍線部は「予想に反した気持ち」程度の意味になるうか。したがって、ここで

はこの「予想」の内容を押さえていくことがカギになる。これについては、30行目の「見るや君」の和歌のモチーフを読み取っていけば容易であろう。要するに、宮が期待していたのは相手も「秋の夜の月」を見てくれていることなのである。これに対して女(＝筆者)が「月はしも見ず」と応えたので「あてがはずれた」ということになる。こうした経緯を押さえた選択肢は(ウ)。

問6 ここに挙げてある和歌は全て百人一首からのものなので、比較的簡単だったのではあるまいか。

和泉式部の娘は小式部(または小式部内侍)である。この歌には、「和泉式部、保昌に具して丹後国に侍りけるころ、都に歌合のありけるに、小式部内侍、歌よみにとられて侍りけるを、中納言定頼、局の方にまうで来て、『歌は如何がせさせ給ふ、丹後へ人は遣はしけむや、使ひはまうで来ずや、如何に心もとなくおぼすらむ』など、たはぶれて立ちけるを、ひきとどめてよめる」という詞書がついている。『古今著聞集』『袋草紙』などにも載っている逸話なので、このエピソードを知っている人も多かったであろう。

ちなみに、(ア)は紫式部、(イ)は和泉式部、(エ)は右大将道綱母、(オ)は清少納言の和歌である。

【配点の目安】 50点 問1 各3点×5＝15点 問2 各4点×2＝8点 問3 5点 問4 各6点×2＝12点 問5 6点 問6

【問題】

【一】 出典…廣末保『可能性としての芭蕉』／オリジナル問題

現代語訳

師のいはく……（芭蕉）先生の言うには、天地万物の変化は風雅の根源である、と言っている。（発句のように）静止した物は不変の姿である。（天地万物のように）動いているものは変化（のさま）である。（なので、その動きの）瞬間として（句に）とどめなければ、（動きの中の風趣は句として）とどまらない。（句に）とどめるというのは、（動きの中の風趣を）見とめ聞きとめることだ。飛花落葉が散り乱れる姿も、その（散り乱れる動きの中で）見とめ、聞きとめなければ、（動きが）おさまると（途端に）その活きているもの（「風趣」）さえ消えて跡形もなくなってしまう。

俳諧の益は……俳諧の目的は日常普通の言葉を洗練させる（「風趣のある詩語に昇華させる」）ことである。（なので）つねに（その根本たる）もの（「日常の現実」）をおろそかにしてはならない。

吉野山は……吉野山はどこ（にあるの）かと誰かが尋ねましたら、ただ（桜の）花に（取合わせる地として）は吉野、紅葉に（取合わせる地として）は立田を詠むことと思ひまして詠むだけで、（吉野や立田が）伊勢（国）なのか日向（国）なのかは知らないと答えるのがよいのだ。

解答

問1 1 ㊦けんこん 10 ㊦かいこう 問2 2 ㊦還元 5 ㊦背反

問3 エ 問4 イ 問5 動ける〔43行目〕 問6 7 ㊦オ 8 ㊦ア

問7 自然は、無く不変な秩序〔37～38行目〕 問8 俗語によって経〔60行目〕

問9 イ 問10 イ

解説

問3 傍線部直前の指示語「そのとき」の指示対象は直前の一文の「現実よりも貧弱な非現実を」詩としての『純粋性』を皆に擁護しようとする」の部分であり、それを筆者は「詩の存在理由をみずから放棄すること」と断じている。ここでいう「詩の存在理由」とは、本文冒頭からの記述内容によれば、「現実」と「詩」との関係のうえで、「詩」というジャンルが存在する必然性である。その上で筆者は「詩作品の価値そのものは、現実的・相対的な場で、たえず問いなおされねばならない。その非現実の世界が、果して現実に耐えうるようなものであるかどうかという意味においてである」(9～10行目)という。つまり傍線部「一人合点の確信」とは、対置される現実に耐えられないような脆弱な作品を、詩として「純粋」であるということのみを頼りに擁護することである。この点から各選択肢を検討すれば、エが正解と判断できる。ア「詩を作るという行為」、「表現の目的」ウ「詩人の内面世界の特異性」オ「対象の代替不能な価値」いずれもこの部分の論理とはかかわらない。また、イ「現実的な根拠をもたないのに」では「詩」の作品世界が「現実的な根拠」を持っているかどうかの問題となってしまう、ここでの論理とは次元の違う話となる。

問4 傍線部の内容は本文一段落目「それは、詩と現実との関係を問うということでもあるが、この問いを拒否する権利は、詩人といえども与えられてはいまい」(3～4行目)という記述と同内容である。この記述の直後に「それは、詩の存在証明にかかわる問だから」と続いている点から、正解はイである。問3の解説でも見たように、本文冒頭から、話題の中心は「詩と現実との関係を問う」、つまり詩が現実に対して存在することの必然性を問うことが「詩の存在理由」の「証明」だということ、したがって傍線部「詩人もまた、それを問うものとしての立場から、完全に自由ではありえない」と続く展開である。ア「つねに現実を基盤として作られる」「扱われた現実と作品上の描写が齟齬しない」では詩の中で描かれたことが現実と一致するかどうかの問題となってしまうし、ウ「詩人の存在証明」では「詩」ではなく「詩人」が問題となってしまう。エ「詩は、を」を指して作られる」とあるが、「詩」が何を「目指して」いるかはここでの話題ではなく、オは傍線部の「言い換え」になっていて、設問要求である「理

由」の説明ではない。

問5 きわめて基本的な文法知識の問題。「釈迦に説法」だろうが、簡単に解説しておく、傍線部の「り」は四段活用 of 已然形とサ変動詞の未然形に接続する存続・完了の助動詞で、活用はラ変動詞と同じである。接続を見れば明らかのように、直前はかならずエ段の音である。その観点から探してゆけば、傍線部の少し後の「動ける」が「動け（エ段の音）＋る」であり、直後の「物」という語を連体修飾しているので、「る」は連体形ということになり、条件に合致する。あとは設問要求に注意して「文節」で抜き出せばよい。

問6 いずれの傍線部も引用された『三冊子』の中の叙述であり、引用直後の「土芳によって」蕉風俳諧の意識を見事に集約、「いま存在するものが次の瞬間には存在しないという無常観」「かえって、いまそこにある自然は凝視され、さらに、自然の変化を風雅の種として積極的にとらえなおす」などの記述を参考に考えてゆく。

7 各選択肢では、「時として」の部分の具体化と、「とどまらず」の部分で何が「とどまら」ない、あるいは何をとどめられないのかがそれぞれ違っている。特に傍線部「留めざれば、とどまらず」は、その直前の「動ける物」について語っている部分であるということから考えれば、「とどまらず」についての訳出に注目してゆけばよいと判断できる。ア「動きを」では動いているもの自体を物理的に静止させることになり、エ「句の姿が」では「動ける物」をとどめることにならない。ウ「後には忘れて」では記憶が「とどまらず」になる。残ったイ・オの比較ではイ「感興」は観察者の主観的「感動」の側面が強くなるのに対して、オ「風趣」は対象の中に認められる「趣」の側面に重点がある。引用直後の記述から考えても、オのほうが適切である。

8 これも各選択肢で決定的に違うのは傍線部「活きたる物」の部分の訳である。ここの「活きたる物」は「風雅の種」となるものであり、引用直後の記述の内容を前提に判断すれば、容易にアが正解とわかる。「活きたる物」がそれぞれ、イ「風流心」「ウ「活動的な趣」、エ「生きていた風情のあるもの（これでは何かの生命体である）」オ「風趣があったこと」となっていて、いずれも「風雅の種」とはいえないものか、そうでなければ引用直後の記述内容とズレている。

問7 本文第六段落目以降が、藤原俊成や連歌師など中世歌人の自然への態度と蕉風俳諧の自然への態度の対比で論が進められている

ことから考えれば比較的簡単に答えが出せる。中世歌人たちの自然認識について語られているのは本文第七段落目と第十二段落目で、傍線部「自然観」の説明として一番適切な部分を探せばよい。なお、正徹を例にとった部分は「吉野」という具体例による説明の形になっているので、一般化された「自然観」の説明としては正解部分に劣る。

問8 前問同様、対比の論理になっていることがわかっていれば、第十三段落目に「芭蕉もまた、俗語を正さねばならない。そして、いうまでもないが、正すということは」(59行目)云々とある部分に正解があることは明らかである。なお、傍線部直後の段落末尾「俗語との葛藤をへて詩語に転化される」(57～58行目)も正解候補たり得るが、傍線部「正す」に対して「転化される」と受身の表現になっている点から、傍線部とは主体が違うことになる。その点で正解より劣る。

問9 この段落で例示されている中世の歌人正徹にはない「意識」が傍線部の「松の事は松に習へ」であるということを前提に、各選択肢を検討すればよい。

ア 「現実を超えた独自の詩境を確立」の部分は、傍線部直後の「俗語との葛藤をへて詩語に転化」に対応する内容である。つまり本文の内容をおさえてはいるものの、傍線部自体の「説明」という点ではイの「現実に裏打ちされた詩的情趣を感得」のほうがよい。

ウ 「素直に言葉にすることによって作為を排した」云々は本文中にまったく根拠のない記述。

エ 「象徴化し普遍化した次元」では正徹の態度と差がなくなる。

オ 「習得」の対象が「現実と相互に交感する詩」ということになる。

問10 芭蕉というと、『奥の細道』に代表される紀行ばかりが有名だが、彼の最も重要な業績は詩(つまり芭蕉の場合は俳諧)にある。その部分についての知識は盲点になりやすいので注意しておくこと。正解の『夜半楽』は与謝蕪村の俳諧集。なお、ウ「続猿蓑」エ「冬の日」オ「曠野」は『俳諧七部集』に含まれる俳諧集だが、ア「虚栗」は『俳諧七部集』の一つではない。

【配点の目安】 50点 問1 各3点×2＝6点 問2 各3点×2＝6点 問3 5点 問4 5点 問5 3点 問6 各4点×2

|| 8点

問7

5点

問8

4点

問9

5点

問10

3点

現代語訳

終日に……一日中吹き込んできてまとわりつく風の騒がしさに、(光源氏は) 仕方がないとは言っても、やはりたいそう(御心配になって) お疲れになったので、思わずうとうとなさる。(光源氏ほどの方が御滞在になるには) 畏れ多いほどの(みすばらしい) お住まい(の様子)だったので、ただ(光源氏は) 寄りかかって(うたたねをして) いらつしゃると、(いつのまにか) 故桐壺院が、まったく(この世に) 生きておられたお姿もそのままに(夢枕に) お立ちになって、「なぜこんな粗末なところになどいるのか」と(言つて)、(光源氏の) 手を取って(さかんに) お引き上げになる。「住吉大明神のお導きになるのに従って、はやく船を出して、この(須磨の) 浜辺を立ち去ってしまいなさい」と(故桐壺院は光源氏に) 仰せあそばす。(光源氏は) たいそううれしくて、「(父上の) 畏れ多い面影とお別れ申し上げて以来、さまざまに悲しいことが多くあるばかりでございませう、もういっせ、この(須磨の) 海岸に身を投げ捨ててしまおうか(と思います)」と(光源氏が故桐壺院に) 申し上げなされたところ、「そんなことは) 決してあってはならないことだ。こ(のそなたの今の境遇) は、ただ単にほんのちよつとしたことの報いなのだ。私は(帝の) 位にあったとき、(意識的には) 過つた行為はしなかったのだが、自然の成り行きで仏道に背くことがあったので、(しかしながら) その罪(のつぐない) を全うするほどの時間がなくて(死んでしまい)、この世のことを顧みることはなくなってしまったが、(それでもそなたが) たいそう(ふさぎこんで) 物思いに沈んでいる(様子) を見るのは堪えがたくて、(あの世からわざわざ) 海に入り、海岸に上がって(ここまでやって来て)、たいそう苦勞はしたが、こうしたよい機会に宮中に(行って帝に) 奏上したほうがいいこともある(ということ) によって、(こうしてここに) 急いで上がってきたのだ」と(言つて)、(故桐壺院は) 立ち去っておしまいになった。(光源氏は父院との久々の対面に) 飽き足りず、悲しい気持ちで、「(私も) お供に是非とも参りましょう」と、泣きに泣いておしまいになって、(ふと故桐壺院の方を) お見上げになったところ、人影もなく、ただ月の顔がこうこうと(明るく照る) ばかりで、(それでもなお) 夢を見たという気もしない。罪得ぬべき……(関わり合いになることで) 罪作りをしてしまいそうな案内役だ(からこれ以上は関わるまい) と、(あの方〔浮舟〕が私〔薫〕のことを) 見なしていらつしゃるであろうことが(非常に) 恥ずかしい。私が出家しないままの姿で、今まで過(こ)してき(たことが(自分でも) いかにも不思議なことなのです。(というのも、私は) 幼かった(ころ) から、(遁世を) 願(ねが)う気持ちが深くござ

いきましたが、三条の宮（＝母である女三の宮）が傍目にも心細い御様子で、頼りがいもないこの私だけを拠り所に思っていらっしゃるのが、捨て去りがたい出家の妨げのように思わずにはいられませんで、（ずっとこの俗世に）関わり続けてしまいますうちに、自然と（私の）官位などというものも高くなって（しまい）、自分自身の扱い方も思い通りにくくなどなって（しまつて）、（遁世の気持ち）心に念じながらも（ぐずぐずと歳月が）過ぎてしまいます（うち）に、また、避けようのない（さまざまな俗事の）ことも、数多く（私の身に）つきまといつきまといするばかりで暮らしてはきたのですが、公私に（わたつて）、（この俗世から）離れられないことにつけても、そのような（いつまでも出家もしないような）状態であつたのでございましょう（と我ながら思われます）。云々。

解答

問 1 薫と匂宮にはさまれて自殺をはかろうとしたり、出家したりする浮舟（31字・32行目）

問 2 (ウ) 問 3 (エ)

問 4 (4) (a) ㊦ (ウ) (b) ㊦ (オ) (c) ㊦ (イ) (5) (a) ㊦ (イ) (b) ㊦ (オ) (c) ㊦ (イ)

問 5 此の浦を去りね〔7字・9行目〕 問 6 (エ)

問 7 薫大将・現世 問 8 源氏・薫大将

問 9 X ㊦ (エ) Y ㊦ (ウ) Z ㊦ (オ)

解説

問 1 これに関しては、「アンビバレント」（＝どっちつかず・相反する感情の板挟みにあう状態）という言葉が34行目に再び登場していることに気がつけば容易に見出せたとはいえず。この部分で「アンビバレントに悩む女」とされているのは「浮舟」。あとは字数制限

に合わせて抜き出せばOK。この「浮舟」が「かげろふの日記」の女と並べられていることも、傍線部の直前の「『かげろふの日記』や『和泉式部日記』の登場人物たちとおなじように」(3〜4行目)という表現に合う。

いずれにしても、同一表現・類似表現に着目することで解答が導けるのである。

問2

この傍線部の「ね」は、動詞の連用形に接続しており、いわゆる《完了》の助動詞「ぬ」である。(イ)段の音に接続している「ね」を探していけばあっさりと(ウ)に絞れる。(エ)も(イ)段の音に接続しているがこれはナ変動詞「死ぬ」の命令形の活用語尾である。(ア)は未然形に接続しているので、打ち消しの助動詞「ず」の已然形。(イ)と(オ)はあまりポピュラーな用法ではない(上代の用法である)が、終助詞として「なむ」と同じように「他にあつらえ望む願望」の意をつけ加えるものである。この「ね」は動詞の未然形、もしくは助詞「そ」に接続するものである。

問3

傍線部の直前が「我は位に在りし時」であることからすれば、この「過つ事」が、「帝としての立場上は」の意味であることは推察できよう。そう解釈すれば、それとの対比で傍線部の「自から」が「たまたま・偶然・自然と」の意味に取れることになる。

この意味合いを最も忠実に反映している選択肢は(エ)。(ウ)は逆である。(ア)や(オ)のように罪の「程度」を問題にしているのではなく、ここでは「性質」が問題となっているのだ。(イ)は後半部分の「自分が犯罪者とされてしまった」の部分が誤り。

問4

簡単なのは双方ともに(b)であろう。「敬意の起点」は、敬語の種類にかかわらずその語を発した人(会話文なら話者、地の文なら筆者)である。ここではどちらも地の文で用いられているので、(b)にあたるのは(オ)ということになる。また、傍線部は(4)・(5)ともに尊敬の補助動詞として用いられている。したがって、(c)の「敬意の対象」は(a)の「動作主」と同じになる、というわけで動作主を読み取っていくことがカギになるのだが、これについては引用部分直後の「これは源氏が明石の流謫地で、夢に故院があらわれて流謫をとかれる夢告をうけるくだりである」(17行目)の一文を押さえ、なおかつこの引用部分とその最後の場面であることを押さえれば、引用された「明石」それ自体を全部読まずとも推測できるはず。夢告を終えて「立ち去」ったのは故院、それを「見上げ」たのは源氏である。詳しくは現代語訳を参照のこと。

問5 前問でも検討したとおり、この「夢告」をしたのは「故院」。彼の科白は引用文中では「何ど斯く……」「住吉の……」「いと有るまじき……」の三つである。そのうちで「内容を的確に」示す部分を探していけばいい。ここでは、問2で検討したように、「此の浦を去りね」の部分だけが源氏に対する命令になっている（他の部分には命令のニュアンスをもつ表現はない）ことに気がつけば、模範解答部分が抜き出せよう。

付言すれば、「他で設問になっている部分は抜き書きの解答にならない」と勝手に決めてかかるのは誤りである。実際の入試でも、傍線部を含む部分が抜き書きの解答になっている場合がある。

問6 この問題文は『源氏物語』の前の部分と後の部分とを比べることに、〈貴種流離〉のパターンが転換していることを指摘したものである。この空欄部分は、その前半部分についての説明部分である。この内容は、後の部分に「薫大将では貴種流離は、天上から地上へではなく、地上から煉獄への関係となつてあらわれる」（31～32行目）と説明されているところに着目できれば、簡単に「天上から」とわかる。この意味合いを反映している選択肢は(E)のみ。

問7 これも古文からアプローチしていくよりは、現代文部分を探っていく方がラクである。「薫大将では、もう幼時から現世を否定するところがあったのに〈三条の宮〉の孤独にほだされ、現世にかかわっているうちに……」（29～30行目）の部分がこの傍線部に相当していることを見抜ければ、ここでの「関係ひ」は「薫大将」と「現世」とのそれとわかる。

問8 〈貴種流離〉とは、生まれの高貴な主人公が、人里離れた異界に流されて数奇な運命をおくる、という古代の物語にありがちなパターンを意味する。問題文中で「源氏」のことを「いわば現世にあつて流浪の宿命をうけた〈貴種〉」（17～18行目）と述べていることに気がつけば、だいたいの意味合いはわかるだろう。したがって、この文章前半部における〈貴種〉は「源氏」であり、それと対比される後半部の〈貴種〉は「薫大将」である。

問9 問題文の内容より、空欄に入るものはいずれも『源氏物語』以後の物語であることがわかる。この点で(A)および(B)（十世紀半ばの成立）・(イ)（十世紀後半の成立）は外れる。あとは内容と照らし合わせながら入れていく。Xは「虫めづる姫君」が手がかりに

なるので比較的簡単なはずだ。Zは「主題のあつかいかたの特異性」から「とりかへばや」が、残るYは「狭衣物語」が、それぞれ入る。

【配点の目安】

50点 問1 5点 問2 3点 問3 4点 問4 (4)(5)とも(a)・(b) 1点・(c) 2点 (計8点) 問5 5点 問6
4点 問7 各3点×2 6点 問8 各3点×2 6点 問9 各3点×3 9点

書き下し文

陳子昂初めて京に入りしとき、人に知られず。胡琴を売る者有り、価は百万なり。豪貴伝視して、弁ずる者無し。子昂突出し、左右を顧みて千緡を以て之を市ふ。衆驚き問ふに、答へて曰く、「余此の樂を善くす」と。皆曰く、「聞くを得べきか」と。曰く、「明日宣陽里に集ふべし」と。期のごとくして偕に往けば、則ち酒肴畢く具はり、胡琴を前に置く。食し畢り、琴を捧げて語りて曰く、「蜀人陳子昂、文百軸有るも、京畿に馳走し、塵土に碌碌として、人に知られず。此の樂は賤工の役にして、豈に宜しく心に留むべけんや」と。挙げて之を碎き、其の文軸を以て遍く会せる者に贈る。一日の内、声華都に溢る。時に武攸宜建安王と為り、辟して書記と為す。

現代語訳

陳子昂が初めて上京した時、彼の名は誰にも知られていなかった。胡琴を売っている者がいて、代価は百万銭であった。富貴の人々は次々に見に来たが、その価値がわかる人はいなかった。子昂は突然とび出し、左右を見回して百万銭を出してそれを買った。衆人が驚いて問うと、子昂は「私は胡琴の樂が得意なのです」と答えた。人々が「聞かせていただけませんか」と願うと、子昂は「明日、宣陽里にお集まりください」と答えた。約束の通りにそろって行くと、酒や肴がすべてそなえられ、胡琴が前に置かれていた。食事が終わると、子昂は琴をささげ持って話し出したことは、「蜀の出身の陳子昂は、百巻の文軸を持ちながら、京の都を走り回り、塵やほこりの中でうだつはあがらず、名前も知られておりません。このような音楽（というものは卑しい樂工の仕事で、どうして心にかけるべきものでありましょうか（心にかけるべきものではありません）」と。そして胡琴を持ちあげて碎き、（自作の詩文を記した）文軸をあまねく参会者に贈呈した。彼の詩文の名声は、一日のうちに長安中に知れ渡ったのである。その時、武攸宜が建安王に封ぜられたが、彼は陳子昂を召して書記に任じたのであった。

問1 ホ 問2 有_下売_二胡琴_一者_上

問3 口 問4 イ

解説

問1 受身の基本構文の一つに「為_二A所_レB(AのBする所と為る)」がある。(人に知られる)という意味をこの形を使って表すと「為_二人所_レ知(人の知る所と為る)」となる。その否定は「不_レ為_二人所_レ知」の形である。ところで、「為_二A所_レB」の形の場合、時に「為」か「所」のどちらかの文字が省略されることがある。そうすると「為AB」「A所B」の形になるが、受身形にはかわりがない。そこから、「為」「所」を受身の助動詞と見なし「る・らる」と読むようになったのである。傍線部は「所」が省略された形で、さらに否定詞「不」をともなっている。選択肢ではホ「ひとにしられず」が最適。

問2 「胡琴」は、西方異民族の弦楽器の名。胡弓(こきゅう)〔三味線に似た形の三弦で、小さな弓でこすって鳴らす〕のことであるとも言われる。傍線部は「胡琴を売る者有り」と訓読する部分。一・二点のほかに上・下点も使う。基礎的句形の一つ。

問3 百万銭をボンとはたいて胡琴を購入した陳子昂に向かって、人々はその胡琴にそんな価値があるのかを尋ねる。「私はこの音楽が得意なのです」と答える陳子昂に人々が言う言葉は、「聞かせていただけませんか」ということになるだろう。「聞くを得べきか」と読むべき箇所、正解は口。

問4 「宜」は「よろしく……べし」という再読文字。傍線部は「豈に宜しく心に留むべけんや」と訓読する。陳子昂は「此の楽は賤工の役(この音楽は身分の低い楽工の仕事)」であると言ひ、だからお集まりの高貴な皆様が「心にかけるべきものではありません」と続け、胡琴を持ち上げて砕いてしまったのである。

この後陳子昂は集まった有力者たちに自分の文軸を贈呈し、一日のうちに「声華」を都にあふれさせた。つまり、彼の文学が広く知れわたったのである。建安王となった武攸宜に、書記の官に任じられたのも、その「声華」ゆえであった。